AITC

野菜研究所ニュース

No.5／2011.6

地方独立行政法人　青森県産業技術センター野菜研究所

＜掲載記事＞

○巻頭言（所長あいさつ）
○平成23年度各部の主要な研究課題と概要
・栽培部
・品種開発部
・病虫部
○トピックス
・ＰＲ拠点館オープン（4/28）
・もち小麦商品開発研究会総会（5/19）
・人の動き

巻頭言（所長あいさつ）

元気な農家づくりを目指して

この４月に野菜研究所へ着任しました。これまでは、農林総合研究所でイネの品種や栽培技術を担当してきました。これからは、東北で最も高い生産額を誇る青森県の野菜生産体制の更なる強化と、県内農家の所得向上のための新技術開発に向けて、職員と共に努めて参ります。

野菜研究所は、昭和12年に農林省酒精原料作物指定試験地として設立され、その後、34年に青森県農業試験場古間木支場、47年に畑作園芸試験場、平成15年に農林総合研究センター畑作園芸試験場と県の組織改革がありましたが、21年に地方独立行政法人青森県産業技術センター野菜研究所となりました。研究所は、県から独立して３年目を迎えますが、県の時代以上に、生産現場の技術的な問題を、現場の方々と連携しながら解決して、農家所得の向上のために役立ちたいと考えております。

研究所の試験作物は、ナガイモ、ニンニクを中心に、夏秋イチゴ、ゴボウ、エダマメなど多岐にわたりますが、生産現場の課題・要望をうまく受け止め、重要性や緊急性の高い課題に重点的に取り組み、生産現場でうまく使える技術を開発し、早期に普及に繋げたいと考えています。

３月の震災被害の復旧に向けて大変な時期ですが、元気な農家を沢山作り、元気な青森県にして行きたいと考えていますので、研究所へのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。

所長　横山　裕正

平成23年度各部の主要な研究課題と概要

○栽培部

課題名：青森ブランド野菜販売力強化のための新作型開発（県交付金　2007-2013年度）

普通栽培より収穫時期が早くかつ高品質なニンニクのハウス栽培作型を開発する。また、四季成り性イチゴ「なつあかり」の夏秋どり栽培における高品質・安定多収技術を開発する。

課題名：ナガイモ産地強化のための高品質栽培技術の確立（県交付金　2006-2013年度）

種子別に栽培特性を明らかにし、生育特性に応じた施肥体系を確立する。また、栽培法の違

いが内部品質や貯蔵性に及ぼす影響を明らかにする。

課題名：ジベレリン処理を多面的に活用したヤマノイモの画期的な生産技術の開発（農水省事業　2009-2011年度）

ヤマノイモ類のむかご着生を抑える効果があるジベレリンを用いて、ナガイモを対象に圃場レベルで有効な処理方法（処理濃度、処理開始時期、処理間隔等）を開発する。

課題名：高品質国産ニンニクの周年安定供給を実現する収穫後処理技術の開発（農水省事業　2009-2011年度）

高品質ニンニクの周年安定供給を実現するために、ニンニクの氷点下貯蔵に対応した適切乾燥方法、出庫後の萌芽・発根を抑制する適切な高温処理方法を開発する。

課題名：ゴボウ貯蔵酸欠事故防止のためのガス環境等調査とゴボウの呼吸特性の把握（県交付金、役員枠；2011年度）

工業総研の新エネルギー技術部及び環境技術部と協働して、ゴボウの収穫から市場までの貯蔵実態とゴボウの収穫時期別の貯蔵呼吸特性を明らかにし、ゴボウ貯蔵施設における酸欠様事例発生の要因を解明して予防策を策定する。

〇品種開発部

課題名：特産野菜優良品種の育成（１）ナガイモ優良品種の開発（県交付金、シーズ研究；2007-2013年度）

既存系統「園試系６」を収量品質等で超えるような、平成21年度に当研究所が育成し品種登録申請中の「あおもり短八」の良好な特性を維持しつつ形状の安定性を改良した品種の育成を目指す。さらに、防除コスト等を低減し生産性向上に資する病害抵抗性品種や、収量品質が良好で、消費者、実需者に選好される内部品質に優れた新品種を開発する。

課題名：特産野菜優良品種の育成（２）ニンニク優良品種の開発（県交付金、シーズ研究；2009-2013年度）

既存系統「福地ホワイト（黒石Ａ系統)」を収量品質等で超えるような、球肥大・外観品質・病害虫抵抗性を強化・付与した品種の育成を目指す。

課題名：特産野菜優良品種の育成（３）エダマメ優良品種の開発（県交付金、シーズ研究；2010-2013年度）

当研究所育成の既存品種「あおもり福丸」「あおもり豊丸」を収量品質等で超えるような、早生・良食味の特徴を維持しつつ、収量の安定化、多収化が強化された品種の育成を目指す。

課題名：もち性小麦の生産基盤の強化とその特性を活かした新たな地域特産商品開発（県交付金、役員枠；2010-2011年度）

世界的にも珍しいもち性小麦品種「もち姫」は、従来小麦にはない独特の食感を加工品にもたらし、新商品開発につながる食材として注目を集めている。本課題では、生産から製品化へのルートを強化するために、野菜研と農産物加工研が部門間連携し、生産面で課題となっている低アミロ麦の発生等に対応するため、内容成分に影響を与える環境要因を解明するとともに、「もち姫」の特性を十分に活かした新たな地域特産商品を開発する。

○病虫部

課題名：イモグサレセンチュウ汚染軽度ニンニク圃場における被害軽減技術の開発（県交付金　2011-2012年）

本県特産野菜のニンニクは、イモグサレセンチュウによる被害が問題となっている。そこで、クロルピクリン剤などの土壌くん蒸消毒により被害を効果的に抑制できるような汚染軽度な圃場向けに、簡便な処理により同程度の効果を発揮する防除技術を開発する。

課題名：特産野菜の気象変動に対応した青森型総合病害虫防除技術の開発（県交付金　2009-2013年度）

本県ではニンニクのほか、夏秋イチゴの作付けも拡大している。夏秋イチゴでは要防除水準に基づく生物的・物理的防除を組み入れた総合的病害虫防除技術を開発する。ニンニクでは、ウイルスフリー種苗の導入を行っているにもかかわらず、ウイルス病により激しいモザイク症状を示す株が増加しいる。そこで、弱毒ウイルスによる感染低減技術を開発する。

課題名：野菜の病害虫防除試験（県交付金　2007-2013年度）

新たに発生して問題となっているトマトのネコブセンチュウ類やニンニクの白斑葉枯病、ゴボウのヒョウタンゾウムシなどの病害虫について、迅速で正確な診断技術を開発する。また、発生要因や発生生態を解明し、効果的な病害虫防除技術を開発する。

トピックス

PR拠点館オープン

青森県産業技術センターのＰＲ拠点館「Ａ’　ｌｅｒｒａ（アレッラ）」が4月28日、青森市新町1丁目にオープンしました。センターの研究成果を生かして開発された商品や試作品約40点が並び、訪れた市民が興味深そうに見入ったり、実際に試用していました。館内ではプロテオグリカンを使った化粧品や発光ダイオードを使って野菜を栽培する装置などが目を引いていました。

唐澤理事長は開所式で「売れる商品作りに向け、消費者の声を的確に取り入れていきたい」と挨拶しました。営業時間は午前10から午後6時で、毎週月曜日と年末年始は休みとなっています。

もち小麦商品開発研究会総会

平成23年5月19日、野菜研究所において、第７回もち小麦商品開発研究会（総会）が開催されました。参加者は、青森県立保健大学教授の藤田会長、生産者の赤沼営農組合、県内食品製造業者など８社、新産業創造課、農産園芸課、２１あおもり産業総合支援センター、野菜研究所の21名でした。

最初に、平成22年度の事業報告があった後、平成23年度の事業計画について藤田会長から説明がありました。3月11日に発生した東日本大震災により、多大な被害を受けた参画企業もあったことやもち小麦製品をアピールする予定であった健康博覧会2010が開催延期になり、出展を取りやめざるを得なかったことなどが報告されました。また、事業計画では平成24年産の作付面積把握のため、各企業の必要量を早急にとりまとめることを確認しました。

会長からは、これまでのもち小麦の研究成果について報告の中で、もち小麦製品の老化の遅さ、口腔内での付着性の低さや粉砕度の高さなどから飲み込みやすいことなどもち小麦の優れた点が説明されました。

また、今回は、参画企業の一つである奥入瀬フーズ（十和田市）さんが低アミロ小麦粉を用いて試作した「そば餅」と「パウンドケーキ」を参加者全員で試食しました。いずれも通常アミログラム粉で試作したものとほぼ遜色ないものに仕上がっており好評でした。

人の動き

１．転出者（ 平成23年４月１日付 ）

職　　名	氏　　名	転　　出　　先
所長	三上泰正	本部事務局　企画経営室　総括企画経営監
病虫部長	荒井茂充	りんご研究所　県南果樹部　県南果樹部長

２．転入者・昇任者（ 平成23年４月１日付 ）

職　　名	氏　　名	旧　　所　　属　・　職
所長	横山裕正	農林総合研究所　企画経営監
研究管理員	松田正利	青森県病害虫防除所　六戸町駐在　主幹
研究管理員	細田洋一	野菜研究所　主任研究員

３．非常勤労務員

（病虫部・非常勤労務員）新採用　　大下静香、新堂さほり

職員集合写真